

副詞的修飾成分「～と」を整理する

—具体化の「と」、引用の「と」、情態副詞の「と」をめぐって—

丹羽 順子

要 旨

引用句「～と」の統語論的位置づけに関しては、「～と」を格成分とみなすか、あるいは副詞的修飾成分とみなすか、二つの立場がある。「言う／思う」などの「引用動詞」と相関する場合は格成分とみなされることが多いようだが、相関しない場合には、同じ引用句が、情態副詞との連続性の点からも副詞的修飾成分とされることもある。

具体化の「と」による修飾句（節）は、構文上は述語を、意味上は名詞を修飾する表現形式であるが、本稿は、引用の「と」および情態副詞の「と」も同様の修飾の仕方をするを明らかにした。二者は広義の具体化の「と」の中に含まれるものと位置づけることが可能であり、巨視的観点から副詞的修飾成分「～と」の一貫した説明を提唱する。

〔キーワード〕 具体化の「と」 引用の「と」 情態副詞の「と」
引用構文 副詞的修飾句

An Analysis of Adverbial Element “TO” :

on TO of specification, of quotation, and of manner adverbs

Niwa, Junko

This paper discusses what will be referred to as the “TO of specification”, “TO of Quotation”, and “TO of Manner Adverbs”. The latter two can be considered subcategories of the first. These semantically modify the noun of a complement, sometimes non-existent, while syntactically modifying the predicate. “TO of Specification” expresses “examples”, “lists” or “processes”, while “TO of Quotation” expresses “utterances” or “thoughts”, and “TO of Manner Adverbs” expresses “manner” and “onomatopoeic aspects of actions and states” .

1. はじめに

近年、構文論において「引用」に関する研究（砂川，1987等、藤田，1987等）が進み、引用構文の構造、その類型等が明らかになってきた。また、引用構文と連続する表現についてもいくつかの研究（藤田，1990、1991）がなされ、「～と」による連用修飾が整理されてきている。中でも、藤田（1991）は「引用」を「引用されたコトバ」の問題と「～と」という形式の問題とに分けることにより、渾然としていた引用の問題を整理した。すなわち、発話、思考など「引用されたコトバ」を伝達するのは「～と」という形式に限らないし（（1）参照）、一方、「～と」形式も「引用されたコトバ」のみを導入するものではない。藤田氏は「引用」に認められるこの二側面を図1のように捉え（説明上それぞれの領域をA、B、Cとする）、（2）のような典型的な引用表現は、両側面の重なり部分Bに属すると位置づけている。

（1）「母に何もなくて、良かったわ」

「こっちもホッとしました」

「普通の空き巣じゃありません。そんなこと、はっきりしてるわ」

「その点は同感です。こんなタイミングで空き巣が入るはずはありませんからね」

加奈子は、少し考えていたが、やがてパッと起き上がった。

（赤川次郎『いつもの寄り道』 p.304）

（2）「どうも」とわざわざ札を言った。

（赤川，p.57）

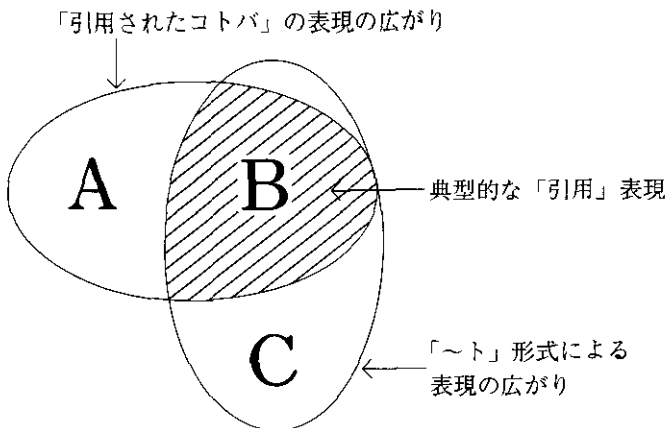


図1

そして、Cの部分、引用表現に隣接する「～と」形式による表現には、(3)～(6)のようなものがあるとしている。(3)は情態副詞、(4)～(6)はフォード(1993)で具体化の「と」と名付けた表現である¹⁾。

- (3) 前にすわった人がクチャクチャと音をさせて食べたりすると、こちらの食欲がなくなります。(千葉敦子『ニュー・ウーマン』p.173)
- (4) クリームチーズや小エビなどをくるんで前菜にしたり、こってりしたソースを間にはさんだクレープを何段も重ねて主菜にしたり、生クリームで和えた果物をくるんでデザートにしたり、とクレープは応用範囲が広いので、専用のパンを一つ持っても損になりません。(千葉、p.159)
- (5) ...エリトリアはオスマントルコ帝国に占領され、中央政府と断絶させられた。以後支配者がエジプト、イタリア、英国と変わる。(伊藤正孝『アフリカふたつの革命』p.14)
- (6) ...ふろまで四人いっしょと「仲良し」ぶりを演出して見せた。(朝日新聞、1986-8-18)

本稿は、「引用」を「引用されたコトバ」と「～と」形式という、意味の面とカタチの面を分けて考える藤田氏の「引用」論に意見を同じくするものであるが、氏が「「～と」形式による表現の広がり」とした表現(たての楕円内)全体が「広義の具体化の「と」表現」に相当すると考える。すなわち、「～と」形式をとる表現は、引用句も情態副詞も広義の具体化の「と」表現であり、引用の「と」および情態副詞の「と」は、具体化の「と」の下位類と位置づけられるのではないか、ということ論じたいと思う。具体化の「と」による修飾句(節)は構文上は述語を、意味上は名詞を修飾する(逆に言えば、名詞を具体化する)表現形式であるが、(2)～(6)において「～と」は~~~~部の名詞を具体化していると言え、「～と」による修飾の仕方に共通した機能を見出すことが可能だからである。

2. 引用句「～と」

「引用」の問題を考える際に、引用句と地の文との関係で論じられてきたことの中に、次の二点がある。「場の二重性」²⁾、そして引用句「～と」と述部との相関の問題である。「引用」とは、砂川(1989)の定義に従い「ある発言の場ないしは思考の場で成立した発言や思考を、それとは別の発言の場に置いて再現する」こととする³⁾。すなわち、「引用構文」⁴⁾には二つの異なる場が関与しており、砂川氏はこれを「場の二重性」と呼んでいる。

大切なことは、例えば(7)において、「どうぞ」という発話は発話者である彼に属するものであり、引用句「どうぞ」は事実として現実の世界に既に存在しているということである。その点で、発話を伝達する地の文とは質を異にする。

(7) 彼が「どうぞ」と言った。

次に、引用句と述部との相関の問題であるが、(7)のように、引用句「～と」に示される発話や思考と述部に示される動作、状態とが事実上等しい場合と、(8)のように、「～と」と述部の動作、状態が別の事態であり、二者は単なる偶然か、何等かの必然性を伴って同一場面に共存する場合とがある。前者を「単一事態型」の引用構文、後者を「事態共存型」の引用構文とする⁵⁾。(7)は前者の例、(8)は後者の例である。

(8) 彼が「どうぞ」とドアを開けた。

本稿は、引用の「と」および情態副詞の「と」と、具体化の「と」との相対的位置を見るために、まず典型的な引用構文である「単一事態型」の引用構文に着目して考察を行う。

さて、この「と」を統語論的にどう位置づけるかについては、従来二つの見方がされてきた。引用句「～と」を格成分とする、すなわち「～と」が動詞にとっての必須成分であるとする立場に立つ研究として、近年では寺村(1981)、仁田(1982)、森山(1988)等があり、一方、これを副詞的連用修飾成分とする立場に立つ研究として、柴谷(1978)、藤田(1988)等がある。森山氏と藤田氏の研究に言及しよう。

森山氏は(9)を(10)のように置き換えることができることから、「～と」は格成分であるとしている。

(9) 『南無阿弥陀仏』と言う。

(10) 題目を言う。

しかし、『南無阿弥陀仏』と」と「題目を」とは系列的な関係に立つものではなく、(11)のように統合的な関係に立つものである。そして『南無阿弥陀仏』と」は「題目」を「具体化」したものだと思えることができる。

(11) 『南無阿弥陀仏』と題目を言う。

フォード(1993)では、このような「と」を「具体化の「と」」と名付けた。具体化の「と」による修飾句(節)(副詞的修飾句(節))は、構文上は述語を修飾するが、意味上は補語の名詞を修飾(内容補充)する(逆に言えば、名詞を具体化する)機能を有するものである。(12)(13)においても同様に、引用句「～と」は述語を修飾すると同時に意味の上では、~~~~~部の名詞を内容補充していると言える。

- (12) 「ちよっ、これじゃア、評判になりっこねえよ。シャンソンのわかりそうなのは、一人もいねえんだから……。」と、穴倉は、ブツブツ文句をいった。(獅子文六『バナナ』p.237)
- (13) 母の手料理をお腹一杯食べて……などと、忤気なことを考えている。(赤川、p.313)

このように「～と」と「を格」補語の両方が顕在している場合ばかりではないが、引用構文の構造としては(14)のようになっていると考える。

- (14) ～ガ 引用句 ト ～ヲ 言う
思ふ

実際の用例にあたると、(15)のように「～と」のみが現れ、「～を」が顕在していない場合が多い。森山氏は、(10)における「題目」を、引用内容を名付けているという意味で「ラベリング」と呼んでいるが、「～を」が現れていないということはラベリングをする必要がないということであり、それを抽象的な形で顕在化させれば、(15)は(15)'のように考えられる。

- (15) 彼が「どうぞ」と言った。(=(7))
(15)' 彼が「どうぞ」と(親切な) ことを言った。

「こと」のような形式性の高い名詞は、何らかの限定を受けないと落ち着きが悪いので形容詞を付けて提示した。また、「～を」は「こう／そう」などの指示語に取って代わることもある。

- (16) 「やっぱり、霜！」とそえ思って、そのイバラの枝に手を触れてみると、それはまたもや霜ではなかった。(林望『イギリスは愉快だ』p.44)

一方、藤田(1988)は「～と」を副詞的修飾句としているが、「言う／思う」といった「引用動詞」と相関する場合は格成分的(動詞が「～と」を必須の成分として要求する)になるとしている。同じ引用句「～と」が、動詞との相関の有無によってその統語的機能を変えるという論にはやや賛成しがたい。

また、(17)(18)の_____部は副詞的修飾句であるが、述語の内容を限定しており、(17)'(18)'との意味上の関連性から「準引用」表現と言われることもある⁶⁾。これらの表現との連続性を考慮しても、引用句「～と」を副詞的連用修飾成分とするのが妥当だと考えられる。

- (17) …一瞬、何だかバカバカしく思えた。(吉本、p.126)
(17)' …一瞬、何だかバカバカしいと思えた。

(18) 早くごはんを食べるように言った。

(18)' 早くごはんを食べろと言った。

3. 情態副詞の「と」

情態副詞の「と」とは、擬音（声）語、擬態語等に付いてそれに連用修飾機能をもたせたり、副詞にさらに付く「と」である。「と」の付く副詞は大半が情態副詞である⁷⁾。情態副詞については仁田(1983)に詳しい分類があり⁸⁾、「動きそのものに内属する側面の様子に言及することによって、動きが実現される際の実現のされ方を表わしている」ものであるが、情態副詞「～と」はこの側面を具体化するものと言えよう。(19)において、情態副詞「クチャクチャと」は「食べる」という動きを、それに伴って起こる音の側面から修飾しており、すなわち「音」を具体化しているということになる。

(19) 前にすわった人がクチャクチャと音をさせて食べたりすると、こちらの食欲がなくなります。(=(3))

同様に(20)では、情態副詞「ガラガラと」は「開く」という動きを、音の側面から修飾しており、このことをあえて顕在化させると(20)'のようであると考えることができる。

(20) 戸がガラガラと開いて、若い女性が入って来た。(赤川、p.215)

(20)' 戸がガラガラと(音をたてて)開いて、...

ただし、ここで注意しなければならないのは、()部が省略されていて、解釈に際しその都度補わなければならないということではない、ということである。「ガラガラと」が動きに伴う音の側面を限定していると分かるということにおいて、()部は動詞に内属されているのである。従って、同じ情態副詞であっても動詞によってどの側面を具体化するかは違ってくる。

(21) a. はっきりと(いい字で)書いて下さい。

b. はっきりと(いい口調で)言って下さい。

情態副詞の「と」は広義の具体化の「と」の中に含まれるものであるが、情態副詞と狭義の具体化の「と」表現とは、(22)(24)のような例を介して連続している。

(22a)は具体化の「と」表現で(22b)のように考えられ、「西へと」は「荒野」を具体化している。(22c)も同様に具体化の「と」表現であるが、畳語形式となっており、副詞に近づいてくる。

- (22) a. 開拓者たちは西へと進んだ。
 b. 開拓者たちは西へと（荒野を）進んだ。
 c. 開拓者たちは西へ西へと（荒野を）進んだ。

具体化の「と」表現の一つに「例示」の特殊用法がある。これは「～と」部分の要素およびその並び方に厳しい制約があるもので、それだけに規則的で、慣用表現に近づいてきている表現である。「～と」部分は数値を表すもので、その並び方は「A、A⁽ⁱ⁾と」という一定のパターンを形成している。

(23) ところが、一ヶ月二ヶ月と過ぎるうちに...と考えるようになりました。

（朝日新聞、1986-6-28）

(22c) は「A」が数値ではないが、「A、A⁽ⁱ⁾と」というパターンになっており、連続性が見られる。この点において、(23) もまた副詞に接近した表現と言えよう。その他、「あれやこれやと」「あちらこちらと」「我も我もと」「次から次へと」なども同様に、「狭義の具体化の「と」と」情態副詞の「と」との境界に位置すると考えられる。もう一つ例をあげておく。

- (24) a. ゆうべは一晚中、ああでもない、こうでもないと「推理」を働かせて、眠れなくなりました。 (赤川、p.155)
 b. ...あれこれと「推理」を働かせて、眠れなくなりました。
 c. ...あれは自殺だろうか、いや自殺と見せかけて殺したのだ、いやもしかしたら別人かも知れないと「推理」を働かせて、眠れなくなりました。

(24a) の「ああでもない、こうでもない」は「推理」を具体化（の程度は低い）している。(24b) ではより固定化された表現になり、副詞へと近づく。(24c) のようにすると、具体化の程度は高くなり、また「思考」である点で引用表現と解釈できる。

4. 引用の「と」および情態副詞の「と」の位置づけ

以上考察してきたことをまとめると、次のようになる。なお、既述したことだが、「こと」のような形式性の高い名詞は、何らかの限定を受けないと落ち着きが悪いので形容詞を付けて記した。

- (25) a. 人に会ったり電話したりと、色々なことで忙しかった。
 b. おいしい物を食べようと、呑気なことを思った。
 c. おいしい物を食べようと、呑気なことを言った。

- d. ガラガラと、音をたてて開いた。
 e. はっきりと、いい口調で話した。

(25 a) は狭義の具体化の「と」、(25 b) (25 c) は引用の「と」、(25 d) (25 e) は情態副詞の「と」の表現の例であるが、「～と」の機能は一貫している。すなわち、構文上は述語を、意味上は補語の名詞（~~~~部）を修飾（内容補充）する（逆に言えば、名詞を具体化する）というものである。一方、「～と」部分の表す意味を見ると、(25 a) は「例示」、(25 b) は「思考」、(25 c) は「発話」、(25 d) (25 e) は「情態」を表すというように違いがあり、その点においてそれぞれ違いを呈している。

また、言葉の質の面では、引用の場合は事実世界に生起した（する）発話・思考がそのまま持ち込まれるが、具体化の「と」の場合はそうではなく、言葉として記号化されたもの、情態副詞では、現実に発せられた音から言葉として記号化されたものまでと、幅がある。すなわち、引用構文では、「～と」部分に現実の世界という異なる場に生起した思考・発話が持ち込まれ、「場の二重性」が成立するという点が、他の具体化の「と」表現および情態副詞の場合と異質であるが、「と」のもつ機能は一つであると言える。従って、引用および情態副詞の「と」は、広義の具体化の「と」の中に含まれると考えられる⁹⁾。

本稿は、副詞的修飾成分「～と」の本質的機能を上述のように捉えることにより、引用の「と」および情態副詞の「と」、具体化の「と」に一貫した説明を提唱した。1節において、図1を参照し本稿の考察の範囲を提示したが、「引用」表現に関わりをもつ、「引用されたコトバ」の表現、「～と」形式による表現（すなわち、広義の具体化の「と」表現）、そして副詞的修飾句による「準引用構文」の三者は、図2のように捉えることができるのではなかろうか。

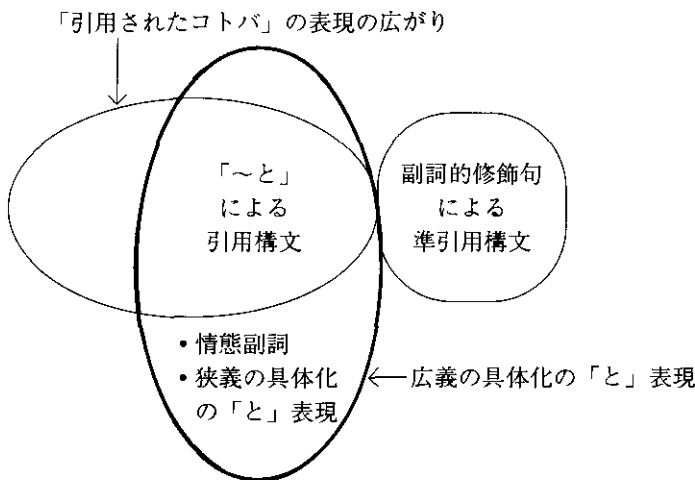


図2

また、本稿では「単一事態型」の引用構文のみに絞ったが、稿を改めて「事態共存型」の引用構文を含めての考察を行いたいと思う。

注

- 1) 具体化の「と」による修飾句（節）の表す意味としては、「例示」「列举（単独列举）」「過程」がある。
- 2) 砂川（1987）参照。
- 3) まだ発話されていない将来のことも引用することがある。
- 4) 藤田（1991）の用語に従う。
- 5) 藤田（1988）は「事態共存型の引用文」を α 類、「単一事態型の引用文」を β 類と呼んでいる。
- 6) 藤田（1981）参照。
- 7) 鈴木（1980）は情態副詞を「と」の付く副詞としている。ただし「と」の付く副詞でも「結果副詞」（まるまると太った子ブタ）のものもある。
- 8) 仁田氏は「様態副詞」と呼んでいる。
- 9) 一般に「と」の付く副詞は「に」の付く副詞に比べて具体的（山田（1970）によれば「外貌的」）であると言われているが、「と」自体が具体化の「と」であれば、当然のこととなる。

用例出典

- 『いつもの寄り道』 赤川次郎 新潮文庫
『アフリカふたつの革命』 伊藤正孝 朝日選書
『バナナ』 獅子文六 角川文庫
『ニュー・ウーマン』 千葉敦子 三笠書房
『イギリスは愉快だ』 林望 平凡社
『哀しい予感』 吉本ばなな 角川文庫

参考文献

1. 柴谷方良（1978）『日本語の分析』大修館書店
2. 鈴木 泰（1980）「情態副詞の性質についての小見」『山形大学紀要(人文科学)』9-3
3. 砂川有里子（1987）「引用文の構造と機能—引用文の3つの類型について—」
『文藝言語研究(言語篇)』13 筑波大学文芸・言語学系
4. —————（1988）「引用文の構造と機能（その2）—引用句と名詞句をめぐって—」
『文藝言語研究(言語篇)』14
5. —————（1988）「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9 明治書院
6. —————（1989）「引用と話法」『講座日本語と日本語教育』4 明治書院

7. 寺村秀夫 (1981) 『日本語の文法(下)』大蔵省印刷局
8. 仁田義雄 (1982) 「格の表現形式－日本語」『講座日本語学』10 明治書院
9. ——— (1983) 「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2-10 明治書院
10. フォード順子 (1993) 「具体化の「と」による修飾の特徴について」『日本語教育』80
11. 藤田保幸 (1981) 「準引用」『待兼山論叢(文学篇)』15 大阪大学文学会
12. ——— (1987) 「引用されたことばと擬声・擬態語と－「引用」の位置づけのために－」
『詞林』2 大阪大学古代中世文学研究会
13. ——— (1988) 「「引用」論の視界」『日本語学』7-9 明治書院
14. ——— (1991) 「「引用」の解体」『愛知教育大学研究報告(人文科学編)』40
15. 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
16. 山田孝雄 (1970) 『日本文法講座』宝文館